

〈論文〉

留学生と日本人学生の協働学習で 学生たちは何を学んだか

— テキストマイニングによる振り返りアンケートの分析から —

浅井尚子

要旨

留学生と日本人学生の協働学習についての研究は多く見られるが、テキストマイニングによって、両者を比較した研究はあまり見られない。そこで、本研究では、留学生と日本人学生が協働学習において何を学んだかについて、授業後の振り返りアンケートをもとに、テキストマイニングによって分析・考察した。その結果、留学生は、日本や日本人に対して抱いていたステレオタイプ的な見方から、実際の日本や日本人に触れてわかった新しい日本・日本人についての見方ができるようになったということ、また、日本人学生も留学生から刺激を受けて、今まで気づかなかった日本や日本人像に気づき、協働学習が有効に作用したということがわかった。

キーワード：協働学習，クールジャパン，テキストマイニング，振り返りアンケート

1. はじめに

近年、多くの大学で、グローバル化や国際化が推進されている。その一環として、外国人留学生と日本人学生が、同じ教室で学ぶ協働学習や交流の機会が増加しており、多くの教育実践が行われている。多文化クラス、

国際共修クラス，混成クラス，合同クラス等，クラスの呼び方はさまざまであるが，異なる価値観や多様性を受け入れ，共に学ぶという点で共通している。

2017年，文部科学省中央教育審議会大学分科会 制度・教育改革ワーキンググループは，「ポスト留学生30万人計画を見据えた留学生政策について」で，これから大学の国際化を行っていく中であるべき大学の姿として次のような提言を行っている。

このような我が国と世界を取り巻く状況を踏まえ，ややもすれば内に閉じていると指摘されることがある我が国の大学は，大学教育のグローバル化にこれまで以上に積極的に取り組むことが必要である。具体的には，留学生の受入れに特化した教育プログラムから脱却し，日本人学生・留学生・社会人学生等が共に学び，多様な価値観の中で切磋琢磨することにより，新たな価値を創造することを促すような，真にグローバルな教育プログラムを提供するための全学的な体制整備に取り組むことが求められるのではないか。

単に留学生の人数に固執するのではなく，多文化共生時代の中で，多様なバックグラウンドを持った学生たちが協働で学ぶ教育の提供を大学側に求める提言である。

本研究では，このような共修クラスにおいて，協働学習がどのように捉えられ，そこで学生たちは何を学んだのかという点について，振り返りアンケートの自由記述文をもとに分析，考察する。分析には，テキストマイニングを用い，可視化する。テキストマイニングは，「テキストデータから，有益な情報を取り出し，キーワードの出現頻度や関係性を分析する方法である」（松井2019）。テキストマイニングによる1つのテキストデータをもとに分析した研究は，さまざま行われているが，2つのテキスト

データを比較分析した研究は、あまり見られない。本研究では、留学生と日本人学生が協働で学ぶ授業実践について報告し、留学生、日本人学生が何を学んだかについてテキストマイニングで比較、検討し、今後の協働学習の授業のあり方について提案を行う。

2. 先行研究

はじめに協働学習についての研究を見ていくことにする。池田・館岡(2007)は、日本語教育における協働学習について、「対等」「対話」「創造」の3要素を挙げている。「日本語教育における協働は、多言語多文化社会を目指す日本語教育という位置づけのもとに、その構成員となる多文化背景の者同士の『対等』を認め合い、互いに理解し合うために『対話』を重ね、対話の中から共生のための『創造』を生み出すものだ」と述べている。

協働学習の具体的実践方法の一つとして、ピア・ラーニングがある。ピア・ラーニングについて奥村(2022)は、「仲間との深い対話から導き出される『気づき』がある」とし、「教室の仲間との対話から社会的関係を築き、自分の考えを吟味し、視野を広げ、自分自身を発見することである」としている。また、ピア・ラーニングには、「学習者が主体的に授業参加の意義を見出し、それぞれの到達目標を立て、達成に向けて活動に参加するという特徴があること」を明らかにしている。松井(2019)では、「学校安全」について学ぶ授業の中で、「留学生の発言、発想は日本人学生にとって大きな刺激となることが示唆された」としている。協働学習が留学生、日本人学生の双方にとって効果的であることは報告されているが、学生たちは、実際に協働学習で何を学び、どんな気づきを得ているのだろうか。本研究は、グループでの取り組みに焦点を当て、協働学習の実践について報告し、学生の新たな学びに繋げることを目的とする。

本研究で分析する際に用いるテキストマイニングに関しては、近年多くの論文で採用されている。武谷・渡（2015）は、授業評価や授業省察についてのアンケートにおいて、「履修者の多用な意見をくみ取れる自由記述の分析が有効である」と述べている。一方で、「自由記述を対象とした研究は数が少ないうえに分析手法にも懸念が残る」としている。例えば、グランテッド・セオリー・アプローチ（GTA）による分析は、「分析結果の信頼性が完全に担保されているとは言い難い」と指摘する。同じデータの分析結果について分析者によって異なる結果が出る可能性について懸念を抱いているのである。その点で、「テキストマイニングはGTAなどの質的内容分析が得意とするニーズ探索性を保持しつつ、同一のデータから同一の結果が導かれるという結果の再現性も保証されることになる」とその有効性について述べている。テキストマイニングについては、さまざまな分析方法があるが、ワードクラウドによる分析は、松井（2019）、織田（2023）などがある。1つのテキストの分析は比較的多いが、2つのテキストを比較し、分析したものは、あまり見られない。

そこで、本研究では、ワードクラウドに単語分類を加え、留学生と日本人学生の自由記述文について比較する。そこから学生たちにどんな学びや気づきがあったのか考察していくことにする。

3. 授業の概要

3.1 科目の概要と授業の流れ

対象授業は、2023年度前期に開講した、外国語学部の講選択科目「クールジャパン論」を学ぶ学部授業（105分×週1回×13回）である。

「クールジャパン」の用語は、アメリカのジャーナリスト、Douglas McGray が使用したのが最初である。（Douglas McGray 2003）クールジャパン戦略推進会議（2015）では、「クールジャパン」について、「外国人が

クールととらえる日本固有の魅力（アニメ、マンガ、ゲーム等のコンテンツ、ファッション、食、伝統文化、デザイン、ロボットや環境技術など）」と捉えている。

本授業は、「日本」を客観的な立場で捉え直し、現代日本文化の独自性・普遍性について理解することを目的とする。そのうえで、多様な文化の価値観を受容できるようになることを目指す。グループ活動や発表を通して、「クールジャパン」について対話・討論をすることで、自分の思考を言語化し、情報発信できるようになることが到達目標である。

受講者は、学部の1~4年生で、留学生と日本人学生が共に学ぶ必修クラスである。内訳は、留学生15名（うち、定住者1名を含む）と日本人学生17名、合計32名である。留学生の出身国・地域は、中国13名、台湾2名である。留学生の日本語レベルは、中級後半から上級である。留学生の学年は、1年生が14名、3年生が1名で、日本人学生の学年は、1年生11名、2年生5名、4年生1名である。

授業の構成は、13回のうち、9回までは、一般的な講義型に加え、グループワークを取り入れて話し合いを行う授業を行った。留学生と日本人学生が共に話し合うことに慣れてもらうため、授業の初めに問題を投げかけ、毎回教師が指定した違うメンバーの混合グループで話し合いをした。

その際、1つのグループに必ず留学生と日本人が入るようにし、留学生だけのグループ、日本人学生だけのグループにならないようにした。残りの3回分の授業で、固定したグループで発表準備、発表を行った。13回目の最終授業で、学期末試験・フィードバックで授業のまとめと振り返りを行った。発表準備では、PPTの制作とナレーションの内容を考え、発表練習を行った。発表は2回に分けて行った。本番でPPTを用い、15分ほどの発表・質疑応答を行った。発表の際には、各グループについてのコメントを書いてもらい、そのコメントを匿名でまとめたものを最終授業で配布した。各自読みながら、振り返りアンケートを実施した。

3.2 各グループの構成と発表内容について

発表についてのグループの組み方は、「自由がいい」という学生と「くじ引きがいい」という学生がいたので、両方を尊重し、2段階で進めた。最初に自由に2～3人のグループを作ってもらった。この時、留学生同士、日本人学生同士のグループで組んでもらった。その後、くじ引きで2グループを合わせ、どのグループにも留学生と日本人学生がいる混合グループにした。1グループ4～5人とし、留学生と日本人学生がほぼ2名ずつ、入るように分け、合計8グループとした。

テーマは、「世界に発信したい！ クールジャパン」である。内閣府の「2022年クールジャパン高校生ストーリーコンテスト」や「クールジャパン海外動画投稿コンテスト」を参考にしながら、かっこいいと思える日本についての情報を世界に向けて発信する方法を考えるように伝えた。

グループのメンバーの構成と発表タイトルは表1のとおりである。

表1 クループの構成と発表タイトル

グループ	留学生 (人)	日本人 (人)	発表タイトル
1	1	3	多機能・高性能な日本の文房具
2	2	2	KIMONO
3	2	2	日本のランドセル
4	2	2	日本の回転寿司とラーメン
5	2	2	聖地巡礼
6	2	2	日本の伝統工芸とクールジャパン
7	2	2	日本と世界の月見
8	2	2	和菓子の魅力

4. 研究方法

4.1 調査概要

本研究では、学部1～4年生を対象に発表についての振り返りアンケートを行い、その結果を分析した。

4.2 調査協力者

調査協力者は、選択科目「クールジャパン論」の対面授業（2023年4月～7月）を履修した学部生である。調査する際に、プライバシーを保護し、自由意思による参加とし、参加しないことによる不利益は生じないこと、成績には影響しないこと等を口頭と書面で説明し、同意書を提出してもらった。その結果、履修した学生全員から同意を得られたので、留学生15名と日本人学生17名、合計32名の振り返りアンケートを分析の対象とした。留学生の内訳は、中国13名、台湾2名である。

4.3 調査分析方法と主な質問項目

授業方法や最終授業時に実施した発表についての5段階評価（5が高評価で1が低評価）と自由記述形式のアンケートについて報告する。自由記述文に関しては、留学生と日本人学生に分け、Excelに入力し、データ化した。自由記述文を引用する際に誤字・脱字があった場合は、文意を変えないように表現を変更した。

その後、自由記述文のデータをユーザーローカル AI テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) によってテキストマイニングすることで、可視化した。ユーザーローカル AI テキストマイニングは、株式会社ユーザーローカルの無料のクラウド型マイニングツールである。本稿では、ワードクラウドと単語分類を使用して分析を行う。

ユーザーローカルのホームページでは、ワードクラウドと単語分類について次のように説明している。

ワードクラウドについては、「スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示」したものである。「出現頻度が高い検索ワードを集めた図」である。単語の抽出方法としては、「『一般的な文書でよく出る単語は、重要ではないため、重み付けを軽くする』、いっぽう『一般的な文書ではあまり出現しないけれど、調査対象の文書だけによく出現する単語は重視する』仕組みを取り入れて」行っている。

単語分類については、「2つの文書に出現する単語を、それぞれどちらの文書に偏って出現しているかでグループ分け」している。「グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向」があると述べている。

本研究では、留学生だけに出現する語、留学生によく出る語、両方によく出る語、日本人学生によく出る語、日本人学生だけに出現する語の5つに分類した。

ワードクラウドでは、比較的大きく図示された語は目立ち、特徴がつかめるが、出現頻度が低く、小さく図示された語は軽視しがちである。単語分類を用いることで、出現頻度からは見られない留学生・日本人学生の特徴がより具体的に可視化され、ワードクラウドではわかりにくい「両方に出現する語」も分析できるため、2つの分析方法を採用した。本研究では、この2つの分析方法によって留学生と日本人学生の自由記述文を分析し、比較検討した。

アンケートの質問項目は以下の8項目で、1) から7) までは、5段階で評価してもらった。1) から8) までの自由記述文に関しては、テキストマイニングツールで分析した。質問は以下のとおりである。

- 1) 授業では、毎回、教師がグループを決め、留学生と日本人学生が話し合う場面を設定しました。これについてどう思いましたか。
- 2) 最終発表のグループの決め方は、好きな学生どうしが組んで、そ

の後くじ引きで最終グループを決定しました。これについてどう思いましたか。

- 3) あなたのグループの発表準備はどうでしたか。
- 4) あなたのグループの発表はどうでしたか。
- 5) あなたはグループ活動について協力（貢献）できましたか。
- 6) このクラスは、留学生と日本人学生と一緒に授業を受けましたが、これについてどう思いましたか。
- 7) 「クールジャパン論」の授業を受けて、受ける前と比べて、日本や日本人に対する見方は変わりましたか。
- 8) この授業を振り返ってみてどうでしたか。あなた自身の気づきや学びはありましたか。

1) 2) 3) は、発表前の準備に関する項目、4) 5) は、発表に関する項目、6) 7) 8) は、授業全体に関する項目である。

質問内容を簡単に以下のように要約した。

- 1) 発表前のグループの分け方 2) 最終発表のグループの分け方
- 3) 最終発表の準備 4) 最終発表 5) グループへの自己の貢献度
- 6) 協働学習について 7) 授業後の日本・日本人の見方の変化
- 8) 自己の気づき・学び

次節では、アンケート調査の結果について分析する。

5. 結果と分析

5.1 5段階評価の平均値

前述アンケートの1) から7) の質問における5段階評価について、留学生、日本人学生、全体で平均値を出してみた。(表2)

この表から、概ね5段階で4程度の評価で、授業や発表についての学生たちの満足度が窺われる。とりわけ、6)「協働学習について」は、留学

表2 質問項目別 5段階評価の平均値

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)
留学生	4.8	4.5	4.5	4.1	4.1	4.9	3.9
日本人学生	4.6	4.2	3.9	3.9	4.1	4.7	4.3

生、日本人学生共に高評価である。全体的には、留学生の方が日本人学生よりも評価が高いが、7)の「授業後の日本・日本人の見方の変化」については、日本人学生の方が高い評価となっている。

次節では、自由記述文で、具体的にどのような評価だったのか、テキストマイニングを使用し、見ていくことにする。

5.2 「ワードクラウド」と「単語分類」の分析結果

それぞれの質問に関して、留学生と日本人学生の自由記述文をテキスト化したものをワードクラウドと単語分類の2つの方法で分析を試みた。

5.2.1 発表前のグループの分け方について

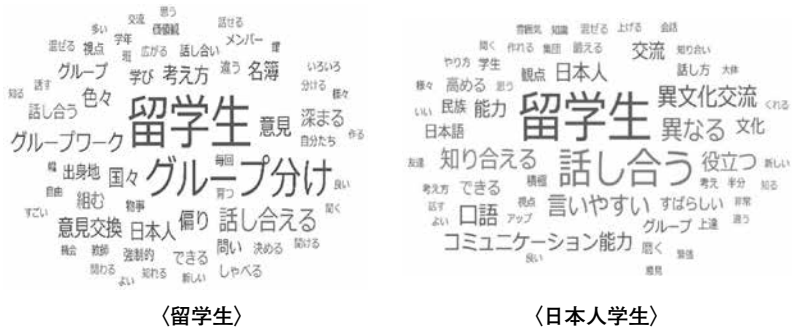


図1 「発表前のグループの分け方」のワードクラウド

図1に「発表前のグループの分け方」のワードクラウドを示す。左側が留学生で、右側が日本人学生である。この結果を見ると、留学生のワード

クラウドは、「留学生」「話し合う」といった語が高いスコアを示している。他には、「コミュニケーション能力」「異文化交流能力」「日本語の能力」といった語が目立ち、「留学生の日本語能力の上達やコミュニケーション能力の向上に日本人とグループになることは、役立つ」といった回答が目立った。それに対し、日本人学生のワードクラウドは、「留学生」「グループ分け」といった語が高いスコアを示している。「留学生の意見も聞ける」や「留学生と話す機会があまりないので、グループワークで話し合いができたのはよかった」といった記述があった。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
能力 いい すばらしい 言いやすい 日本語 半分 考え 異なる 役立つ どちら やり方 アップ コミュニケーション能力 一緒 上達 会話 口語 大体 民族 異文化交流 相手 知り合い 積極 緊張 観点 話し方 集団 雰囲気 非常 上げる	新しい 交流 学生 文化 話し合う 友達	良い 留学生 できる 日本人 よい 思う グループ 細く 視点 様々 知識 くれる 溢れる	意見 違う 毎回 考え方 話す 知る	色々 メンバー すごい 多い 決める 進む グループ分け 備り 機会 自由 作る いろいろ それぞれ アプリ クラス グループワーク 交換 以外 しまっ しゃべる なれる もらう もらえる 使う 出す 出る 分ける 助かる 変わる 広がる

図2 「発表前のグループ分け」の単語分類

次に図2に「発表前のグループ分け」の単語分類を示す。

両方によく出る語を見ると、概ねポジティブな「良い」や「できる」といった単語が並び、留学生と日本人が話し合うことでさまざまな視点から学べたという記述が多かった。留学生だけに現れるネガティブな単語としては、「緊張」がある。留学生の意見として、「知り合いと同じグループの方が緊張しない、意見を言いやすい」といった記述があった。また、日本人学生だけに現れる単語の中に「アプリ」がある。「名簿によるグループ分けだと同じグループになることが多かった」という指摘があり、アプリなどによる違う分け方の提案もあった。

5.2.2 最終発表のグループの決め方について

次に発表時のグループの決め方について分析する。図3に「最終発表時のグループの決め方」ワードクラウドを示す。

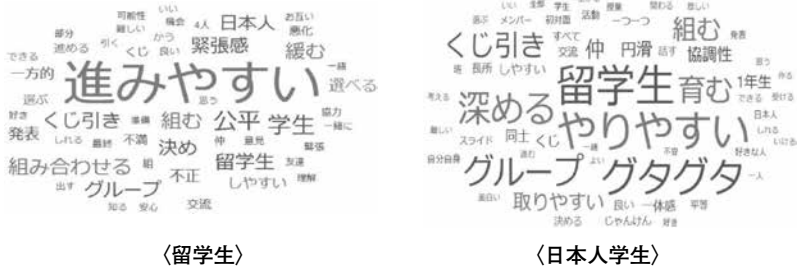


図3 「最終発表のグループの決め方」のワードクラウド

図3では、留学生は、「進みやすい」の語が中心に置かれている。「組みたい学生と一緒にすることは、進みやすい」という意見で、概ねこの方法を肯定的に捉えていた。日本人学生は、「留学生」「やりやすかった」「グタグタ」が高いスコアを示す語であった。「あまり話したことがない留学生と話すことができた」や「グループ内に仲の良い同士がいるので、やりやすかった」という意見がある一方、「好きな人どうして組むときにグダグダしていた」、「やりやすいところは長所だが、色々な人と協力し、交流を深める面では、全部くじ引きでも良かったかも」という記述もあった。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
進みやすい 出ず 組み合わせる 進める 進める 友達 お互い 一方的 不満 悪化 準備	学生 日本人 難しい	良い 組む くじ引き 安心	グループ 留学生	話す メンバー 深める 授業 作る 育む 取りやすい 面白い
か 引く 知る 進む 選べる 2人 4人 しない 一緒に 可能性 機会 決め 相談	学生 日本人 難しい	良い 組む くじ引き 安心	グループ 留学生	話す メンバー 深める 授業 作る 育む 取りやすい 面白い
進みやすい 出ず 組み合わせる 進める 進める 友達 お互い 一方的 不満 悪化 準備	学生 日本人 難しい	良い 組む くじ引き 安心	グループ 留学生	話す メンバー 深める 授業 作る 育む 取りやすい 面白い

図4 「最終発表のグループ決め方」の単語分類

次に図4に「最終発表のグループの決め方」の単語分類を示す。両方によく出る単語をみると、「良い」「できる」「しやすい」「安心」と言ったポジティブな語が並んでいる。留学生にとっては、「全然知らない人と発表するのは、難しい」「グループに仲がいい友達がいたので、少し緊張が緩みました」といった記述もあった。また、日本人学生のネガティブな語としては、「悲しい」があり、「人によってはいいけど、選ばれなかった子は少し悲しくなるかも」という記述もあった。

5.2.3 最終発表の準備について



図5 「最終発表の準備」のワードクラウド

図5の留学生のワードクラウドを見ると、「PPT」のスコアが高い。「PPTを作成するのは楽しかった」、「PPTを共有して作成でき、準備できた」という記述が多かった。日本人学生は、「役割分担」、「行える」のスコアが高い。「グループに役割を振って計画的に準備できた」、「皆でそれぞれの分担を分けて決めたから。コツコツ準備できて負担も少なかった」、「LINEのグループで役割分担や作業の進み具合を確認しながら行えた」など、うまく分担できたグループが比較的多かったが、「あまり時間がなく、早く準備した割には上手く役割分担できなかった」などうまく分担できなかったグループもあった。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
いろいろ 全編 発価 考え 部分 頑張る 1年生 3人 sns はじめ 一人 一緒に 不足 交流 作成 共有 分業 努力 協力 意見 新聞 方法 方面 日本人 最初 欠席 残念 満足 結果 過程	良い グループ ppt 完璧 皆 相談 作る	できる 準備 発表 思う 内容	よい 多い	少ない スムーズ 上手い 大きい 早い 作業 分担 役割分担 それぞれ 原稿 各目 場面 役割 準備期間 負担 しつづ 決める くれる 行える 進める line ぎりぎり いく 助かる 感じる 振る 立つ 行う 行く 話める

図6 「最終発表の準備」の単語分類

図6の単語分類を見ると、留学生は、「みんなよく頑張った」など日本人学生に比べ、ポジティブな単語が多かった。日本人学生は、「準備期間の短さ」あるいは、「早く準備したのに役割分担ができなかった」ことを悔やむ記述があった。役割や分担にこだわっていた学生が多かった。また、負担が一人にかかってしまってぎりぎりだったグループとコツコツと準備したことで、負担が少なかったグループに分かれたことが窺えた。

5.2.4 最終発表について

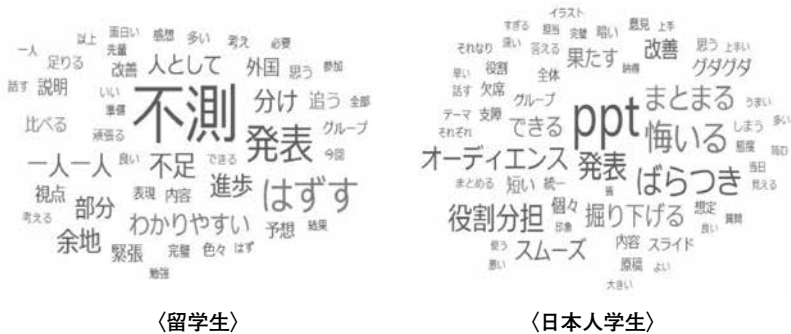


図7 「最終発表」のワードクラウド

図7では、留学生の「不測」の文字が目立つが、これは「予測できない、推測できない」の意味で使っているのではなく、「改善点」が多いという意味で使用していた。「予想よりははずしました」「緊張してうまくでき

なかった」「不足している部分が多い」と悔やんではいるが、だからこそ「もっとできるはず、頑張りたい」という前向きの記述が多かった。日本人学生は、「オーディエンス」の語が比較的大きいが、聞き手の意見を参考に行っている点、留学生と違う点である。「オーディエンスからの意見を見てみると納得できる改善点があったので、完璧にできなかったと悔いています」などの記述があった。日本人学生は、「役割分担」「掘り下げる」も比較的大きいが、その後ろには、「できなかった」が付き、後悔する用語を使った記述が半数近くあった。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
しい わかりやすい 面白い 不足 部分 頑張る 予想 緊張 説明 はずす 比べる 考える 足りる 追う はず 一人 一人一人 不測 人として 今回 仕事 以上 余地 先輩 全部 分け 勉強 参加 外国 必要	多い	良い 発表 思う 内容 グループ 話す 完璧 準備	できる 改善	短い うまい よい 上手い 大きい 悪い 早い 暗い 深い しまう スムーズ 全体 原稿 意見 まとまる 使う ppt それぞれ それなり ばらつき イラスト オーディエンス グタグタ スマホ スライド デーマ 上手 個々 すぎる まとめる

図8 「最終発表」の単語分類

図8を見ると、日本人学生にだけ出現した語として、カタカナ語が比較的多い。「グタグタ」という語は図3で大きく図示されていたが、ここでも出現した。留学生は、「一人一人」「一人ずつ」発表することについて、「緊張」したという意見が出ていた。両方に出てくる語としては、「発表」「内容」「話す」「グループ」などがあり、学生は口頭発表について重きをおいていることがわかる。

たが、個々の作業だったため、協力できたかわからない」と記述した学生に分かれた。

5.2.6 協働学習について

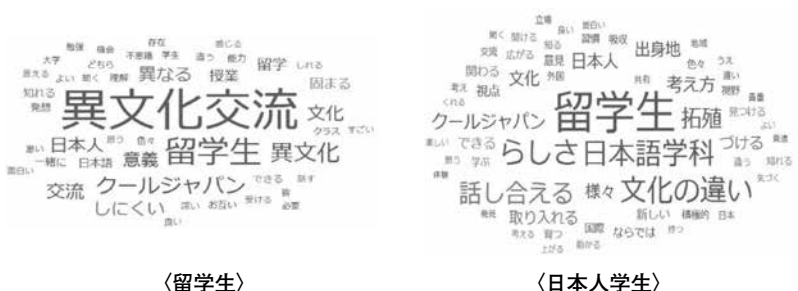


図 11 「協働学習について」のワードクラウド

図 11 で留学生については、「異文化交流」が高いスコアを示している。「異文化交流は大学での必要な能力」とし、「留学生」として、日本人と交流・学ぶことができること、「異文化について学ぶ」ことが「留学の意義」であると捉えている記述が多かった。日本人学生もこの授業において、「留学生」と共に学べたことで、「文化の違い」に気づき、新しい発見をしていた。「国際日本語学科では、普通のことなのでどうということはない」という記述があった一方、「他の学校にはない拓殖大学ならではの良いところ」と捉えている学生もいた。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
お互い 日本語 留学 異文化交流 しにくい すこい 深い どちら クラス 不思議 勉強 大学 存在 学生 必要 思い 意義 機会 異文化 発想 皆 能力 しれる 受ける 固まる 感じる 異なる 言える 話す	よい 授業 一緒に 交流 理解 知れる 聞く	できる 日本人 留学生 良い 思う 文化 面白い 違う 色々 クールジャパン		新しい 考え方 発見 日本 色々 知る 普通 考え 視点 違い 楽しい くれる 考える 見つける 聞わかる うえ ならでは らしさ グループ スタイル 交換 以外 会話 体験 共有 出身地 友達 吸収 国際 づける

図 12 「協働学習について」の単語分類

図 12 では、両方によく出る語として「クールジャパン」が出現している。「クールジャパンですから、もしただ留学生だけなら、理解がしにくいかもしれない」という留学生や「クールジャパンについて考えるなら留学生と一緒に授業した方が良い」という日本人学生の記述も見られた。

「クールジャパン」だからこそ、協働で学ぶ意義を留学生、日本人学生双方が見出していた。

5.2.7 授業後の日本・日本人の見方の変化



図 13 「授業後の日本・日本人の見方の変化」のワードクラウド

図 13 で、留学生の方は、「日本の文化」が中心で、「日本人」「日本社会」が比較的大きい語となっている。「見方はあまり変わらない」と記述した留学生は 2 名で、「もっと詳しく知ることができた」という記述が目立った。他に「日本人と中国人は似ていることを発見した」や「日本人は面白い。前は日本人が静かな人だと思った」と日本人のイメージが変わったことを記述していた。日本人学生は「日本の伝統」が中心で、「日本の伝統だったり、日本人にしか分からないこと、逆に外国人が見た日本等、知らなかったことを多く知ることができた」という記述があった。「自分も日本人だけど、日本についてまだ何も知らないと思った」といった記述に現れているように、知らないことが多くあることに気づけている。

留学生にだけ出典	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出典
詳しい おもしろい 嬉しい 長い 色々 学ぶ 異なる あなた いくつか 中国人 了解 以前 何人 勉強 味方 大体 方面 日本の文化 日本社会 歴史 知識 違い 静か	変わる 部分 理解 授ける イメージ 発見 認識	日本人 思う 知る しい 授業	日本	多い 長い できる ほしい 大きい 新しい 面白い 感じる 推す 外国人 喜ぶ 気づく 考える いろいろ 生活 考え 見方 いく づける 備る 分かる 取り入れる 持つ 持てる 残す 深める 海け込む 知れる 見つかる 見つける

図 14 「授業後の日本・日本人の見方の変化」の単語分類

図 14 では、留学生によく出る語として「イメージ」「変わる」「理解」があり、見方が変わったことがわかる。また、留学生は、以前より日本・日本人について詳しく理解できたとする記述が多く、授業について知識的なものと捉える傾向があった。一方、「日本」が、日本人学生によく出る語となっている。「日本人のいい面ばかり見ていた」や「日本人が考える外国人が喜ぶと思っていることと実際に外国人が日本に来て喜ぶことのギャップのようなものを知ることができた」と記述しており、日本について新たな見方をしている点が特徴的である。

5.2.8 自己の気づき・学び



図 15 「自己の気づき・学び」のワードクラウド

図 15 においては、留学生は「日本の文化」が高いスコアを示している。「あまり気づかない日本の文化をより深く理解」したという記述や「日本

文化と日本人の習慣をもっと知りました」という記述が見られた。日本人学生のワードクラウドは、「クールジャパン」が中心である。「グループ発表を作成している時などにもっとクールジャパンを世界に発信していきたいと思えることができた」、「クールジャパンを世界に発信する日本人としては課題もさまざままだまだ考えなければいけないことは多いと感じた」などの記述があり、発信について重要だと捉えている様子がわかる。

留学生にだけ出現	留学生によく出る	両方によく出る	日本人学生によく出る	日本人学生にだけ出現
面白い しにくい わかりやすい 面白い 数少ない 聞く 理解 日本の文化 くれる 助かる 役立つ 振り返る 教える 比べる 深まる 見せる 認める 頑張る 高まる 学生 期間 極端 社会 習慣 1回 1回目 2回目 いろいろ すてき すばらしさ	知る 面白い 深い わかる よい 新しい 詳しい 内容 勉強 おちてなし 興味 わく 交流	思う 日本 授業 学ぶ 日本人 考える 発表 気づく グループ 日本文化 視点 見方	できる 受ける クールジャパン 感じる 留学生 ことば 色々	ありがとう 多い 長い いく すごい つける 知れる いい 世界 発信 考え方 魅力 法がる 見える 言う 個人的 印象 国籍 意見 善段 活動 発展 視野 強い 楽しい 申し訳ない 興味深い 高い いける おく

図 16 「自己の気づき・学び」についての 単語分類

図 16 では、「学ぶ」「気づく」「考える」という語が両方によく出る語として出現していることで、留学生・日本人学生双方で学びや気づきがあったということが窺える。留学生によく出る語として「知る」「わかる」「勉強」があり、日本文化・日本人について知ることができ、理解できたと捉えている。日本人学生によく出る語として、「留学生」「クールジャパン」「色々」などで、留学生との触れ合いの中で「クールジャパン」の魅力に気づき、多様な見方ができるようになったと捉えている。

6. 考 察

本節では、「発表前の準備」、「発表」、「授業全体」の3つの観点から、考察する。

6.1 発表前の準備について

グループを留学生と日本人学生の混合グループにしたことについては、双方の考えに違いがあった。留学生は自分の日本語能力を向上させるために役立つと考え、日本人学生は、「留学生」の意見を聞く貴重な機会と捉え、それが自分の視野を広げるために役立つと考えていた。留学生が自身の能力を向上させる機会と捉えていたことは、まだ自分自身を上級レベルではないと認識する学生が多かったからではないだろうか。二宮（2022）は、「対等」な立場での協働活動できた要因として、「留学生は上級の日本語力を持つ学部学生だったことから、留学生と日本人の間に支援者・被支援者という関係は固定しにくい状況だった」としている。また、岡田・中村（2016）も「留学生の日本語力がある程度高ければ、日本語を教授言語とする授業でも、積極的に日本人と外国人留学生との『学び合い』に取り組んでいけるのではないだろうか」としている。発表前のグループでは、留学生は、興味が自分の能力の向上に向いている。その意味で、やはり、対等に話し合うには、日本語力は必要なのではないか。

「最終発表のグループを決め方」については、図4の単語分類の「両方によく出る」語から、学生たちに受け入れられたのではないかと推察できる。実際のグループ分けの場面では、留学生の方が問題なく決まり、日本人学生は、図3のワードクラウドの「グタグタ」ということばが象徴しているように対人関係が複雑で時間がかかっていた。また、「全部くじでもよかったかもしれない」という意見は、日本人学生だけに現れており、グループ分けがスムーズに進まなかったことで、このようなコメントが出現したと考えられる。交流を深めることを重視するなら、全員くじ引きというやり方もあり得るが、グループ差が出てくる可能性はある。

「発表の準備」については、留学生は、実際のPPT作成についての記述が多かったのに対し、日本人学生は、グループの役割分担について述べる

記述が多かった。留学生は、準備の中で個人的な作業という点を重視しているのに対し、日本人学生は、グループ全体を捉えているということが窺えた。留学生の中には、「日本人ができるということで一方的」といった記述も見られ、役割分担が上手くいくかどうか、グループ活動の要になっているのではないだろうか。

6.2 発表について

次に、「発表」について考察する。図7や図8を見ると、留学生は、「緊張した」という学生が数名いたが、「自分のやるべきことをやった。不足点が多いが、もっとできるはずなので、頑張りたい」と前向きの姿勢が見られた。外国語での発表ということで、自分の発表に集中し、グループ全体を捉える余裕が感じられなかった。ネイティブの学生がいる中での発表は、留学生にとって、難しいと言えるだろう。一方、日本人学生は、自分自身というよりもグループ全体として捉えていた学生が多かった。改善点について言及する学生が多く、その点で「悔いる」のような後悔する語が目立ったのではないか。日本人学生は、「役割分担」や「役割を果たす」ということにこだわる学生が多かった。

「グループへの自己の貢献度」については、図9からもわかるように留学生、日本人学生共に「PPT」が高いスコア示していた。特に留学生は、全体の語彙量が少ないため、「PPT」の占める割合が大きい。自由記述文からも留学生が作成した部分が多いことがわかる。口頭表現の面では、流暢でないため、あるいは、PPTの技術が高いため、留学生が作成する機会が多いと考えられる。図10の両方によく出る語の「できる」「積極的」からわかるように、留学生も日本人学生も自分のやるべきことはできたと肯定的な見方している。日本人学生は、「発表」の部分では、グループを考え、改善点が多く、後悔するような語を使っていたが、自己の貢献度の面では、貢献できたと考えていることがわかる。

6.3 授業全体について

最後に「授業全体」について考察する。

留学生と日本人学生と一緒に学ぶ「協働学習」に関して、双方が肯定的に捉えていた。図 12 から、「クールジャパン」の授業で、協働で学ぶ必要性、意義を見出していることがわかる。留学生は、日本人学生と学ぶことを異文化交流と捉え、それは「大学での必要な能力」であり、「留学の意義である」としていた。一方、日本人学生も留学生との話し合いを通じて、異なる視点や文化の違いに気づき、新しい発見をしていた。

「授業後の日本人・日本人の見方の変化」について、留学生は、日本人との類似点を発見したり、思い込んでいたステレオタイプの日本人像が変わったりしたことを記述していた。図 14 の留学生によく出る語からも「イメージ」「変わる」とあり、今までのイメージが払拭され、見方が変わったことがわかる。これは実際には接触して初めてわかったことで、以前よりも距離感が近くなったからこそ、わかることである。日本人学生は、「日本文化のいい面ばかりを見ていた」や「『日本人が推したいものを推す』から、『外国人がほしいものを推す』」への変化などがあり、「日本」を改めて捉え直していた。また、「普通に生活しているだけじゃ気づけなかった見方、考え方に触れることができた」という記述から、授業を通して日常生活で見えてなかったものが見えた、自己の中で変容が見られた部分があったことは、大きい収穫ではないか。「まだ大きく変わってはいないけれど、少しずつ確実に変わっている自覚はある」という記述からも自己変容が窺える。

「自己の気づき・学び」からは、留学生も日本人も多くのことに気づき、学んでいることが、図 15・図 16 からわかった。留学生は、「日本人学生や教師の助けがあって勉強できた」ので、「楽しみだった」と記述する学生がいた。また、「以前わからなかったことが今はわかるので興味がわい

た」や「自分の見方が深まった」などのプラスの記述がある一方、「授業では、日本のすばらしさを見せるが、その裏側に何があるのか。正真正銘の日本がもっと知りたい」というマイナスの記述もあった。日本の「おもてなし」などについては、外国人の視点から、「おせっかい」と捉えかねないマイナス面があることも紹介したが、全体的には、プラス面についての紹介や説明が多かった点は否めない。一方、日本人学生は、「自分自身は日本文化がかなり好きだということに気づけた」や「今まで日本人だからこそ知らない、気づけなかった日本の魅力に気づくことができた」という気づきがあった。「今まで日本人として18年間生きてきたけど、ただ生活するだけでは、気づけなかった見方や考え方があることを留学生と学ぶことができて、とても刺激を受けた。本当に大好きな授業だった」という記述が見られ、留学生と学ぶ意義を見出している。

発信に関しても日本人学生は、「日本のいいところは言われてから初めて気づくことが特に多くて、日本はいい国だなと改めて感じることができた。授業で学んだ良いところをもっと広めていきたい」といったように日本について違う視点から捉えることで新しい見方ができるようになったと記述していた。日本についてこれからどのように世界に発信していったらいいのか、その発信の必要性も感じていた。「日本のいいところも知れたが、その発信方法などの問題点なども知ることができたため、面白かった」や「魅力がたくさんあるのに、世界に全然発信することができていない」と発信方法の問題点にも気づくことができた点は、この授業の狙いにも合致していた。

グループで話し合うことから、留学生も日本人学生も今までの見方を再考し、新しい視点から物事を捉えられるようになった点は、大きな成果である。

7. おわりに

本研究では、「クールジャパン」をテーマにした留学生と日本人学生の協働学習について報告し、振り返りアンケートの結果をテキストマイニングによって分析し、考察した。その結果、留学生と日本人の協働学習の中で、学生たちは今まで気づかなかった日本や日本人の見方に気づき、お互いから新しい学びを得ているということがわかった。本研究は、留学生と日本人学生の協働学習をほぼ同数で行い、発表についても均等な割合で行ったが、このような例は少ない。協働学習を通じ、お互いの相乗効果で、新しい学びにつながっている点で、協働学習を行う際に学生数をできるだけそろえることが必要であると考ええる。

また、テキストマイニングを使用し、可視化することで、ことばの面に注目して分析することができた。留学生・日本人学生の2つのテキストを比較し、分析することにより、両方に現れることばやそれぞれに特徴的なことばがデータとして浮かび上がり、ここから注目している事柄の違いや語彙量の違いなどがわかった。日本人学生は留学生より2名多く、もともとの語彙量も留学生より多いので、単純に比較することはできないが、日本人学生は留学生から刺激を受け、自分自身で今まで気づかなかったことに気づけている様子が窺われた。日本や日本人について、再認識し、発信の仕方も踏まえて俯瞰的に捉えられるようになったことがわかった。留学生は、自分が従来持っていたステレオタイプ的な日本や日本人のイメージを実際の授業や発表を通じて、一度壊し、自分なりの見方を構築していった様子が窺われた。しかし、日本人学生と比べるとすべての質問の回答で日本人学生より語彙量が少なかった。この点は、母語での記入や十分な記入の時間の確保が必要となってくる。また、留学生に「緊張」ということばが目立ったことから、グループ活動において、留学生も自由に意見

を述べられる環境づくりを教師が介入して行うなど、配慮も必要である。

本研究は、アンケート上の語彙に注目した考察を行っているが、やはり文字だけでは、学生の本当の真意が測れない。今後は、フォローアップインタビューなどを行い、学生の生の声を含めた分析を行う必要がある。

こうした点を今後に生かし、これからも留学生と日本人学生の協働学習についての研究を深めていきたい。

参考文献

- 浅井尚子 (2023) 「『ポップカルチャー』をテーマにした留学生と日本人学生の協働学習の実践的研究 — 振り返りアンケートの分析から —」『拓殖大学日本語教育研究』8 pp.29-53 拓殖大学日本語教育研究所
- 有田佳代子 (2016) 「市職員は『やさしい日本語』研修をどう評価したか — テキストマイニングによる自由記述解答の内容分析 —」『一橋日本語教育研究』4 pp.21-30 一橋日本語教育研究会
- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門 — 創造的な学びのデザインのために —』ひつじ書房
- 岡田彩・中村伊都子 (2016) 「(実践報告) 日本人学生と外国人学生による『学び合い』の促進 — 同志社大学政策学部を京都アメリカ大学コンソーシアム (KCJS) の協働から —」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』7 pp.89-102 同志社大学
- 奥村恵子 (2022) 「大学生の言語的・文化的多様性を考えた日本語による学びの場のデザイン」『国際学研究』61 pp.19-35 明治学院大学国際学部
- 織田幸美 (2023) 「学生相談室企画としての構成的グループエンカウンター実施についての考察 — テキストマイニングによる感想の分析 —」『研究紀要』79 pp.1-12 高松大学・高松短期大学
- Douglas McGray (2003) 「ナショナルクールという新たな国力 世界を闊歩する日本のカッコよさ」(神山京子訳)『中央公論』118(5) 中央公論社 pp.130-140
- 武谷慧悟・渡寛法 (2015) 「オンデマンド型ライティング授業の改善に向けた授業分析 — 顧客満足分析の視点によるテキストマイニング —」『京都大学高等教育研究』21 pp.1-14 京都大学
- 二宮理佳 (2022) 「正規の総合教育科目における多文化間共修 — 協働学習での学部留学生に着目して —」『中央大学論集』43 pp.33-49 中央大学

- 服部明子 (2015) 「多文化クラスにおける日本人学生と留学生の協働学習」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』35 pp.77-82 三重大学教育学部附属教育実践総合センター
- 伏木田雅子・北村智・山内祐平 (2012) 「テキストマイニングによる学部ゼミナールの魅力・不満の検討」『日本教育工学会論文誌』36 pp.165-168
- 松井典夫 (2019) 「教職志望学生が危機管理意識の国際的な相違を認識することの有効性に関する考察——『学校安全』における留学生と日本人学生の学びの比較から——」『奈良学園大学紀要』10 pp.113-122 奈良学園大学

引用ウェブサイト

- クールジャパン外国人動画投稿コンテスト (内閣府 2020) https://www.cao.go.jp/cool_japan/platform/fjcampaign/fjcampaign.html (2023年6月3日閲覧)
- クールジャパン戦略推進会議 (2015) 「クールジャパン戦略官民協働イニシアティブ」 https://www.cao.go.jp/cool_japan/kaigi/senryakusuishin/pdf/20150617_initiative_honbun.pdf (2023年6月5日閲覧)
- ユーザーローカル株式会社ホームページ <https://textmining.userlocal.jp/> (2023年8月5日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 文部科学省中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ「ポスト30万人計画を見据えた留学生政策 現状・課題」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/05/28/1405510_4.pdf (2023年10月1日閲覧)

(原稿受付 2023年10月25日)